第十講　物語・小説の読解①

Step 1

一　次の文章を読んで、後の各問に答えよ。句読点等は字数として数えること。

【ここまでのあらすじ】　小学生のミオは、近所に住む純一（じゅんいち）（五歳）、翔（しょう）（三歳）の兄弟と日頃よく遊んでいた。ある日、ふたりと遊ぶ約束をしていたことを忘れたミオは、家に来たふたりを追いかえしてしまう。夕方、約束を思い出したミオは、慌てて彼らの家を訪ねた。そこで、この数日間、ふたりが彼らのおばちゃんの家に預けられており、今夜はすでにその家で寝入っていることを知る。

ふたりはミオとの約束を守ったのだ。

おばちゃんの家からミオの家まで、幼い子の足だといったいどのくらいかかるのだろう。ミオの胸は、㋐しめった紙ねんどのように重たくかたまった。

ミオは通りをおばちゃんの家の方に向かって歩きはじめた。

もうふたりは家に帰っている。あとを追ってもしかたがないことはわかっている。でも、足はかってに歩き出していた。

道は川にそってまっすぐにつづいている。

街灯の光が粉々のかけらになり川面（かわも）にゆれる。

生け垣の中から犬がほえかかり、ミオはあわててとびのいた。車がスピードを上げて、すぐ脇を通りぬけた。

手をつないで歩くふたりに、犬はやっぱりほえかかったはずだし、車は小さい兄弟を脇に追いやったはずだった。

①ミオはだんだん早足になる。

まだ三歳の翔は遠い道をぐずったかもしれない。純一は約束を言って聞かせ、はげまして歩かせたのかもしれない。でも、はげます純一にしたってたったの五歳なのだ。

ミオはかけ出した。ａ冷えてこごえているせいか、からだが重たく感じられた。いつからこんなになったんだろうと、ミオはふしぎに思った。純一や翔と同じに、笑って息も切らさずかけまわれたからだを、いったいどこに置いてきたんだろう。

㋑びゅうと雪まじりの風が正面からふきつけた。

㋒風は千本もの小さな針になって、きりきりとミオのからだを刺しつらぬいた。

痛みなのか寒さなのかもうわからなかった。

顔をうつ雪はまつげにつもり、まばたきのたびに目にとびこんではほおをすべり落ちていく。視野がせばまり、見えるものがだんだんおぼろになっていく。

こごえた手でまぶたをぬぐうと、白く小さい影が遠くに浮かんでいるのがぼんやり見えた。

ミオは目をこすった。

かすんだ一本道の先に見えるふたつの影は、純一と翔だった。

ミオに背中を向けて、道路よりも少し高い場所を、何もない宙を、ふたりは手をとり合って翔（か）けていた。

純一はずり落ちたくつ下を気にするでもなく走り、翔は長いマフラーをなびかせて、大きいコートをふくらませてゆっくりと翔けていく。

ミオは小さく口をあけたまま立ちすくんだ。雪が口の中にとびこみ、かすかなほこりの味を残して消えていく。

これはふたりの②夢なのかもしれない。

身を寄せて眠る純一と翔の見ている夢。そこで遊ぶ小さい魂（たましい）は自由になれるのかもしれない。

ミオは思わずふたりの名を呼んだ。

純一がふり向いた。

翔がほほえんだ。

純一が笑顔で手まねきをする。翔がうれしそうに翔けまわる。㋓雪は羽毛のようにふたりのまわりをかろやかに舞っている。

ミオはまたかけ出した。

つんのめるようにしてあとを追った。

でも、ミオが追いかけたとたんにふたりの影は遠ざかった。

走れば走るほど、ふたりは遠く小さくなっていく。そしてだんだんとすがたはかすれ、ゆらめいては淡くなっていく。

何度もころびそうになりながらミオは走った。でもどうしても追いつけなかった。

ミオにはわかりはじめていた。今日のふたりにはもう追いつけないことが。

ふたりはまた会いにきてくれるだろうし、また同じようにミオをしたってくれるだろう。でも、今日のふたりには二度と会えない。あの、追いかえしてしまったふたりにはもう二度と会うことはできないのだ。

雪の勢いは b 増し、灰色のカーテンがおろされたように視界をさえぎり、やがて何も見えなくなった。

③ミオはよろけるように足をとめて、肩で大きく息をした。

（安東みきえ「針せんぼん」より。一部改変）

問一　本文中の a 冷えて　b 増し の――線を施した漢字の読みを、平仮名で書け。

a　（　　　）えて

b　（　　　）し

問二　本文中の②夢を楷書（かいしょ）で書いた場合の総画数と、次の1～4の行書の漢字を楷書で書いた場合の総画数が同じものを、一つ選び、その番号を書け。

1 設　2 雑　3 絹　4 程

問三　本文中に①ミオはだんだん早足になるとあるが、このときのミオについて説明したものとして最も適当なものを、次の1～4のうちから一つ選び、その番号を書け。

1 幼いふたりを裏切ったことにより、自分も何らかの罰を受けることになるかもしれないと、強い恐怖を感じている。
2 自分に会いに来た幼いふたりの様子を思い浮かべては、早くそのふたりに会わずにはいられないと気が焦（あせ）っている。
3 道すがら降りかかってくる危険に、ふたりの身を案じ、その危険を早く取り除いてやりたいと、落ち着かずにいる。
4 互いに支え合うふたりの姿に自分の幼さを感じつつ、一刻も早くふたりに会い感謝の言葉を述べたいと考えている。

問四　本文中に③ミオはよろけるように足をとめて、肩で大きく息をしたとあるが、ここでミオが「足をとめ」たのは、どういうことを実感したからか。解答欄の下の語句に続く形で、二十字以上、二十五字以内で考えて書け。ただし、約束という語句を必ず使うこと。

（解答欄：二十五マス）ということ。

問五　本文の表現について説明した文として、最も適当なものを、次の1～4のうちから一つ選び、その番号を書け。

1　㋐しめった紙ねんどのように重たくかたまったは、おばちゃんの家にいる幼いふたりに会おうとして、ミオが強い決意を胸に抱いて歩き出す思いの深さや重みについて、象徴的に述べている。

2　㋑びゅうと雪まじりの風が正面からふきつけたは、速さを表現する比喩を使うことにより、ふたりと楽しく遊んだ日々について一瞬のうちに振り返るミオの姿を、読者に強く印象づけている。

3　㋒風は千本もの小さな針になって、きりきりとミオのからだを刺しつらぬいたは、吹きつける風雪による痛みを示すだけでなく、自分の行動が招いた結果に苦しむミオの心の痛みも表している。

4　㋓雪は羽毛のようにふたりのまわりをかろやかに舞っているは、擬態語を使って、ふたりの楽しそうな姿を表現する一方で、ふたりとミオとの仲が浅いものに過ぎなかったことを強調している。

（解答欄）

【福岡県】

Step 2・3

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

> 北九州工業高校の女子生徒三郷心(みさとしん)は、鉄を回転させながら、「バイト」と呼ばれる刃物状の工具で加工する「旋盤」に魅力を感じ、「ものづくり研究部」に入った。心(しん)は「高校生ものづくりコンテスト」を目指し、「旋盤の鬼」と言われている先輩の原口(はらぐち)、同級生の吉田(よしだ)、亀井(かめい)たちとともに練習を重ねている。

年が明け、三学期に入った。

吉田も亀井も練習に励み始めた。原口はそんなふたりのために、練習メニューをつくってやった。心(しん)にも専用のメニューが配られた。

①<u>自分用のメニューを見た時、正直目を疑った</u>。基礎練習。そこには新しい項目はなかった。メニューどおりの練習を始めたが、心(しん)は大いに不満だった。こんなにも意欲はあるのに、それを発揮する手立てがない。心(しん)はふと思い当たった。もしかしたら、自分がめきめき腕を上げているのが原口は悔しいのではないだろうか。そんなふうに思うと、原口の切れ長の目が、意地悪そうにゆがんで見えてくる。

気を取り直して工作物をはめ込み、練習にかかる。

キーン。バイトが工作物に触れ、高い音を響かせた。鉄が回転する。そこにバイトが触れる。触れた分だけ鉄は削り取られて形を変える。寸法どおり削れたところで、心(しん)はブレーキを踏んだ。

我ながら、ずいぶん上達したと思う。もう練習を始めた頃(ころ)に感じた戸惑いや恐怖を感じることはない。ごく自然に、あたりまえの作業として、機械を動かすことができる。こんなにうまくなったのに。

その時、先に置いてあった円錐状(えんすいじょう)の物体が目に入った。亀井のテーパ※。心(しん)は引き寄せられるようにそれを手に取った。

なめらかだった。手作業の工程で、こんなに美しい切削ができるなんて。

しばらく眺めたのち、心（しん）は※定盤（じょうばん）にそれを戻した。亀井を見る。いつものように淡々と作業を続けている。焦（じ）れるような熱がみぞおちに込み上げた。②自分でも持て余すような感情を払いのけるように、心（しん）はもう一本丸棒を握った。

先に進めないのなら、せめて倍の量やろう。

「それはメニューにないやろ。」

「でもやります。」

原口は、それ以上は何も言わなかった。

小さな事故が起こったのは、それから四十分後だった。右手の人差し指の先に冷たい感触が走った。※キリコのかけらが突き刺さっていた。

よかった、血は出ない。と思ったとたん、待っていたかのように血液があふれ出してきた。

「きゃっ。」

「どうしたんか。あっ救急箱！」

小さな悲鳴に感づいた原口が叫び、中原（なかはら）先生が救急箱を持ってかけてきた。

「病院に行こう。」

中原先生が上ずった声で言うのがきこえた。

傷口は三針ほど縫われた。向かった救急病院にちょうど腕のよい形成外科の先生がいて、細かく縫ってくれたのだ。おかげで傷あとも残らずにすむらしい。幸い神経までは達しておらず、抜糸をして傷あとが治れば、感覚も戻るだろうということだった。

「神経切らんでよかった。」

帰りの車のなかで、中原先生はしみじみと言った。

「すみません。」

心（しん）はバックミラーに映る中原先生の額に向かってあやまった。けがの原因は自分にあるのはよくわかっていた。原口のメニューに従わなかったからだ。あせっていた。あせりが無理を呼び、疲れてしまっていた。原口の考えてくれたメニューは、個人の経験や体力に合わ

せてあったのだと改めて思い知らされた。

次の日から定盤の一角が、心の指定席になった。製作図と照らし合わせながら、部員の作業を見るのは、思いのほか楽しいものだった。ままにならない指をくわえて、ほかの部員が上達していくのを見るのは、さぞつらいだろうと予想していたので、それは意外なことだった。あせったところでこの指ではかなわないし、まだ痛みもある。今はじたばたできないと開き直ったせいもあるけれど、よく考えてみると、心はもともと職人の仕事を見るのが好きだったのだ。機械音に耳を澄ませながら部員の作業を見ていると、③見学台に座って見渡していた祖父の工場のことが、鮮やかによみがえってきた。

止まることのない工作物の回転や、せわしなく動く職人の手、花火のようなオレンジ色の火花と、ダイヤモンドのようにはねる鉄のしぶき、キリコ。そして、工場内に響き渡る機械の音。当時は断片的に視覚や聴覚に訴えていたものが、今、確かな作業のつながりを伴って目の前にある。そして全体像をつかんだ今、幼い目には非日常の不思議さに満ちて見えていた祖父の工場が、きわめて地道な仕事の場であったことも理解した。

「また、※びびったー。」

吉田が声を上げている。なかなかうまくいかないようだ。バイトを変えてもう一度削り始めたとたん、こんどは妙に重たい音がし始める。

削りすぎ？　心は席を立って、吉田の旋盤に歩いていった。

「バイトをもうちょっと離したほうがいいよ。」

そうアドバイスすると、吉田はへらへらと笑った。

「それはわかっとるんよ。でも面倒なんよねー。」

ダイヤルの微調整をしながら何度も仕上げていくのは、確かに面倒だ。大胆にも一気に削ってしまおうと思ったのだろう。

「なんかいい方法ないかのう。」

「つまらんこと考える暇があったら、手動かせの。」

作業をやめて、腕組みをする吉田の坊主頭を、ちょうど回ってきた中原先生は、ぐりぐりとなでた。そうしながら、

「三郷、原口がネジ切りに入るぞ。」

教えてくれたので、さっそく見に行く。旋盤が回り始める。

キュルルーン。近くできいても、原口の切削音は澄んでいる。すぐにうっすらとネジの溝ができてきた。工作物の上をバイトが移動するたび、ネジの溝が深くなる。

「だんだん浮き上がってきた。」

つい言ってしまって、心（しん）ははっとした。自分の言葉に驚いた。ネジが浮き上がってくるわけもないのに。これじゃあ、まるで、亀井が運慶（うんけい）の彫刻を表現した時みたいだ。今、目の前で徐々に姿を現すネジを見ていると、浮き上がってくるという表現はとてもしっくりくるようにも思えてくる。あらかじめ隠れていたネジ型が、原口の作業によって発掘されたような感じだ。それほどに硬い鉄が自然に形を変えたように見えた。

とん、と、胸が大きく打った。ずっと見慣れていた四角形が、裏に回ったらじつは丸かったのがわかったようなちぐはぐな感覚だ。混乱しているくせに、なぜか視覚だけは妙にクリアだ。浮かび上がるネジから目を離すことができない。

正しい形をつくるために、心（しん）は鉄に立ち向かうような気持ちでいた。けれど、確かな技術というのは、硬い鉄さえも自然に変化させる力を持っているものかもしれない。

亀井を見た。亀井は自分の旋盤についていた。その手元が見える。どうやら原口と同じ作業をしているようだ。すでにネジ切りを習得しているらしい。

完全に離されてしまった。

前みたいに、焦げつくような痛みは感じなかった。ただ胸にやるせない風が吹き抜けたようになって、心（しん）は定位置に戻った。

試されていたのかもしれん。

一日も早くすべての切削ができるようになりたかった。自分の思いは本物だったはずだ。が、その先を冷静に考えてみて、④<u>心（しん）は首を振った</u>。

自分は、ただ高い技術を身につけたいとばかり、純粋に思っていたわけではなかった。見当ちがいに原口を邪推し、亀井には、刃（やいば）のよ

うな競争心を感じていた。意欲は本物だったけれど、それに固執するあまりにやはりどこかがゆがんでいたのだ。神様は、それをたちどころに見抜いたのだろう。

心はファイルに手を伸ばした。気を取り直してページをめくる。と、赤い折り紙がはらりと落ちた。それを手に取った。折りヅルでも折ってみることにする。

「あれ?」

うまく角が合わない。普通なら目をつぶっても折れるくらいなのに、一か所折るのに思わぬ時間を要した。指が一本使えないだけだと思っていたけれど、実際にやってみると、一本使えないことで、ほかの指も不自然な動きになってしまう。

なんとかひとつ折り上げた時には、三十分くらいが経過していた。

その日から、練習を見学する時には折り紙を折るようになった。よくしたもので、しだいに慣れてきた。指の動き方がわかってきたようだった。薬指や小指は自在に動かすのがとても難しかった。いちばん活躍していた右手の人差し指が封じられたことで、それがよくわかった。けれども封じられた機能は、ほかの指の使い方によっては、ちゃんとフォローできるし、動きが鈍かった指も鍛えれば細かく動く。

五十枚入りの折り紙が半分ほどになった頃、それがわかった。そして、いつも折っていたような折り目正しいツルが、手から生まれるようになった頃、心は傷口を抜糸した。

（まはら三桃「鉄のしぶきがはねる」より。一部省略がある。）

（注）※テーパ……円錐状の工作物。
※定盤……測定作業の際に「平面」の基準となる水平な台のこと。
※キリコ……切削の時に出る鉄くず。
※びびった（びびる）……作業時に大きな振動音が出て、製品の出来上がりが悪くなること。

Step 2

問1　①自分用のメニューを見た時、正直目を疑った。とありますが、心が「目を疑った」理由として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。

ア　練習メニューは、心の体力では到底ついていけないものであり、メニューを考えた原口の意地悪と思われるものであったから。

イ　練習メニューは、原口が安全を第一に考えて作ったものであり、心に対する配慮や思いやりが感じられるものであったから。

ウ　練習メニューは、心自身が上手に作業できるようになったと思う内容ばかりで、心にとっては自尊心を傷つけられるものであったから。

エ　練習メニューは、心の技術のレベルを超える難解なものばかりで、メニューを考えた原口の意図をはかりかねるものであったから。

[　　]

Step 2

問2　②自分でも持て余すような感情とありますが、次は、このときの心の感情を説明したものです。空欄にあてはまる内容を、アは二十字以上、三十字以内で書き、イは本文中から探し三字で書き抜きなさい。

亀井が、[ア　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　]のを見て、[イ　　　]を感じたということ。

Step 3

問3　③見学台に座って見渡していた祖父の工場のことが、鮮やかによみがえってきた。とありますが、次は、祖父の工場について、心の見方が幼いころと今とを比べてどう変わったのかをまとめたものです。空欄にあてはまる内容を、五十五字以上、六十五字以内で書きなさい。

幼い目で見た祖父の工場は、

ということを理解できるようになった。

Step 3

問4　④心は首を振った。とありますが、このときの心の心情を説明した文として最も適切なものを、次のア〜エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。

ア　早く切削の技術を習得したいという向上心を持っていたが、実際は自分の技量が低いことを悩んでいた。
イ　仲間と張り合う気持ちがあるようにふるまっていたが、心の中では仲間のだれとも競いたくなかった。
ウ　練習を積み重ねることで自分の技術に自信を持つことができたが、さらに多くを学ぼうとする意欲を失っていた。
エ　自分では目的に向かってひたすら努力していると思っていたが、周囲の人々を誤解し、自分勝手なこだわりを持っていた。

Step 3

問5　本文の表現について述べたものとして**適切でないもの**を、次のア～オの中から**二つ**選び、その記号を書きなさい。

ア　心（しん）、原口、亀井などの複数の登場人物の視点から、それぞれの人物の心情が表現されており、読者が登場人物の心情を客観的に理解できるようになっている。

イ　「キュルルーン」「妙に重たい音」などの擬音語や比喩（ひゆ）などを使って、登場人物の作業の様子や工場内の様子が効果的に表現されている。

ウ　「試されていたのかもしれん」のように、地の文に登場人物の心の中の言葉が入ることで、登場人物の感情や考えが直接的に表現されている。

エ　折りヅルを折る描写により、心（しん）の指の傷が回復し、気持ちが整理されていく時間の経過が象徴的に表現されている。

オ　現実と回想の場面が交互に繰り返して表れることによって、登場人物の成長していく様子が、多面的に表現されている。

□と□

【埼玉県】

〈Note〉

第十講　物語・小説の読解①

Step 1

一

解答

問一、a、ひ(えて)　b、ま(し)　問二、3　問三、2　問四、自分が約束を破ったことは、取り返しがつかない行為だ(ということ。)(25字)(同意可)　問五、3

解説

問二、13画。1は11画、2は14画、4は12画。

問三、ミオの家に来るときのふたりの様子を、「手をつないで歩くふたりに、犬はやっぱりほえかかったはずだし…追いやったはずだった」と想像して、いてもたってもいられない気持ちになっている。

問四、「今日のふたりには二度と会えない…追いかえしてしまったふたりにはもう二度と会うことはできないのだ」と考えている。ふたりと遊ぶ約束を忘れたことがもたらすものの大きさに気づき、心から悔いていることをおさえる。

問五、㋐は、約束を忘れてふたりを追い返してしまったため、気持ちが重苦しくなっている様子を表現している。㋑は、一刻も早くふたりのところへ駆けつけようと焦るミオに、さらに逆風がおそう様子。㋒は、ふたりにすまないと思う気持ちで、吹きつける風や雪から痛みを感じる様子。㋓は、この後、「ミオが追いかけたとたんにふたりの影は遠ざかった」とあることから、ふたりに手がとどかない状況を描いている。

Step 2・3

二

解答

問1、ウ　問2、ア、美しい切削ができるのにいつものように淡々と作業を続けている（29字）（同意可）　イ、あせり　問3、断片的に視覚や聴覚に訴える非日常の不思議さに満ちて見えていたが、今は作業の全体像がつかめ、きわめて地道な仕事の場であった（60字）（同意可）　問4、エ　問5、ア（と）オ

解説

問1、原口に配られた「メニュー」を見て、「こんなにも意欲はあるのに、それを発揮する手立てがない」と不満を持ち、このあと「ごく自然に、あたりまえの作業として…こんなにうまくなったのに」と思っている。

問2、亀井のテーパを手に取り、「なめらかだった…できるなんて」と思ったあとに、「いつものように…続けている」という亀井を見て「焦れるような熱」を感じている。

問3、次の段落に「当時」と「今」の違いが書かれている。「当時」については「断片的に視覚や聴覚に訴えていた」「幼い目には…見えていた」とあり、「今」については「確かな作業のつながりを伴って目の前にある」「きわめて地道な…理解した」とある。

問4、「一日も早くすべての…本物だったはずだ」という考えを否定し、「見当ちがいに原口を邪推し…どこかがゆがんでいた」と感じている。

問5、心の視点から書かれた文章である。また、「今」という時間の経過に沿って展開されている話であり、「回想の場面」は「祖父の工場」を思い出している場面だけである。